

# 人間じんかんに生まうれて "つながりを生きよう" 316

「真実」とは「真」は「まこと」、「実」は「みゆる」と読めますね。

「まこと」が「まこと」のままどこかにあるのではなく、「まこと」が私の中に実る、それが「真実」なんです、実らなければ「真実」ではないですね。私の所にちゃんと届くから「真実」なんです。

定例聞法会のお話しの中から

十一月は急に寒くなって、福光から見える東の山にも何度も雪が下りてきました、「東山に三度雪が降ると在所にも来る」と昔からの言い伝えがあります。これは「もうすぐ雪が降るから冬の構え(備え?)をしなさい」との催促だと思っ

ています。今年はこちらと予測がつかないですね。十一月は、十一月号の「真敬寺だより」の松下幸之助さんの「叱ってくれる人を持つことは大きな幸福である」という言葉について、いくつもお尋ね

をいただきました。私はこの言葉は叱られる人の立場で書かれているのだと解釈しています。叱られる事で新たな気づきが得られると思うからです。若い頃、「法蔵の願心は如来の怒りをあらわす心である」と学びました。叱られた者はその場で反発せず、一度自分の心に確かめ直すことが、願心を受けとめるきっかけになるのではないのでしょうか。

また『南無阿弥陀仏』と唱えられる事って大事にしたいですね」という言葉もいただきました。皆さんからの問いかけが励み

になります。

十一月は多くのお宅に門徒報恩講に伺いました。城端別院報恩講、おやこ報恩講、本山報恩講と雪囲い冬支度。日没が早まり雨の日があったりして忙しく慌ただしい日が続いておりました。そうこうしているうちに今年もあと一ヶ月。段取りよくしていこうと思っています。

## 12月真敬寺行事予定

- 3日(日) 真宗教室 午後2時  
7 大経下巻のはなし
- 11日(月) 正信偈の会 午後1時30分
- 17日(日) 定例聞法会 午前 午後  
本山相続講御助成会  
講師 今井信悟 さん
- 31日(日) 除夜の鐘 午後9時から

## 定例聞法会法話の聞書(抄)

立教開宗の意義

畠山 浄 (はたけやまきよし)さん

七尾市常福寺副住職



今年、御誕生八〇〇年の法要が本山で勤まりました。

「立教開宗」の「立教」とは「教えを立てる」、「開宗」とは「教えを開く」ということです。

『教行信証』は総序の文の後

大無量寿経 真実の教

浄土真宗

と続きます。

「大無量寿経」を真実の教えとして、浄土の真宗ということ掲げられています。

その教えをはつきりするために「教の巻」にまとめられ、次に「行の巻」、「信の巻」、「証の巻」、「真仏土の巻」、「化身土の巻」と六巻にわたって『教行信証』は書かれています。

親鸞聖人が五十二歳の時には『教行信証』の構成がだいたい整っていたであろうといわれています。明治に入りましてから、五〇年ごとに立教開宗をお祝いしようとして、真宗十派で法要を続けているのであります。

開宗の年については『教行信証』の中に「元仁元年は末法に入って何年

…」という言葉があります。お釈迦さまが亡くなられてから年月が経つにつれて、どうやって修行をしたら良いのか、どうすれば悟ることができるとやら、その教えはどうなったのやら、わからなくなってゆくありさまを、年数を基準に数えることができるのだそうです。

元仁元年という年はお釈迦さまの入滅から何年経っているか数えられるから、確実に末法に入っているのだと確かめられるのだそうです。

そしてその元仁元年の年に親鸞聖人は五十二歳であったということ、この『教行信証』が書かれた年が推定されるのであります。

親鸞聖人が浄土真宗が開かれたのは、師匠であります法然上人が念仏の道を開かれて、その道に自分も門徒の一人として歩まさせていただきました

いるという意識であったと思います。

法然上人が大事に見いだされた「ただ、南無阿弥陀仏、一つなんだ、南無阿弥陀仏一つでともに浄土に往生させていただく身を生きているんだ、南無阿弥陀仏一つで仏さまに成る身を生きているんだ」という教えを、親鸞聖人も高らかに宣言されました。

浄土真宗は、親鸞聖人が始めて開いたというのではなくて、法然上人の教えが、親鸞聖人自身の問いに確かめられていかれたのであります。仏教には、お釈迦様から永遠と続いている教えとはどういう教えなのか、何をもって私たちはその教えを仏教としなければならぬのかということをお釈迦さまが亡くなられてから延々と訪ねてこられた長い歴史があるのであります。その仏教の歴史に自分も歩んでいる一人なんだという意識が親鸞聖人

にはあったと思います。

親鸞聖人は比叡山で二十年間修行してきたけれども、そこで説かれていた法華経は私にとっては仏道にはならなかった。そして比叡山を下りて出会った法然上人が説かれていた真実の教えは「大無量寿経」だった。

「真実」とは「真」は「まこと」、「実」は「みのる」と読めますね。「まこと」が「まこと」のままどこかにあるのではなく、「まこと」が私の中に実る、それが「真実」なんです、実らなければ「真実」ではないですね。私の所にちゃんと届くから「真実」なんです。

この娑婆の暮らし、煩惱に振り回されながら、日頃の暮らしをしている中に「今日は良かったなあ、生きとって良かったなあ」と思っていても次の日になると「何で生きとるんやろな」と沈んでしまう、こんな私の所に「真

が届く教えを「真実」というのではないのでしょうか。

浄土真宗では私たちのことを「凡夫」といいますね。「罪悪深重の凡夫」とかいますね。その「凡夫」に「真実」を見分けられるのかという問いがあります。それは皆さんどう思われますでしょうか。

親鸞聖人は「真実の教」ということをどうやって確かめられたのでしょうか。親鸞聖人だったから「真実」を見分けられたのでしょうか。もしそうだったら、すごい人でなかったら見分ける



ことができないうことになりま  
ね。親鸞聖人が残して下さった教えは  
そんな教えではなかったと思います。  
「真実の教」が親鸞聖人と同じように私  
にとっても確かめられていこうとするの  
が立教開宗の大きな意義ではないかと  
思います。

「立教」とは親鸞聖人が「大無量寿  
経」を真実の教えとして立てるんだと  
はっきり宣言されたのですね。ですから  
「大無量寿経」になにが説かれているか  
を抜きにこの浄土真宗は語れないので  
すね。ただ現実には「大無量寿経」に何  
が説かれているのかを聞かないで浄土  
真宗が語られていますね。僧侶の中  
でも学び続ける方はいらっしやるので  
すが抜け落ちているように思います。

私たちがおつとめであげている「正  
信偈」にはこの「大無量寿経」を始め「観

無量寿経」「阿弥陀経」の三部経や、七  
高僧さんが確かめられてきたことがら  
が凝縮されて書かれてあるのですが、  
広くいえば、親鸞聖人が「大無量寿経」  
のこころを確かめてこられた事が書か  
れているでしょう。

## 12月の間法会は

17日(日)午前9時半・午後1時半

本山相続請御助成会です。

講師は昨年へ続き

今井 信悟さん(南砺市 正立寺)です。

『教行信証』についてお話をし

ていただきます。

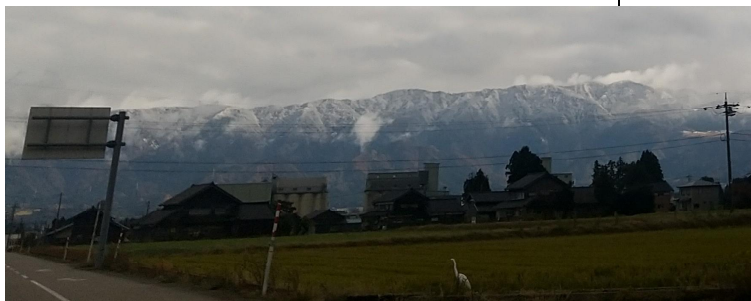
気軽にお誘いあわせてお話を聞

きに來てください。

風の音が冬の到来を感じさせます。真敬寺のお参りも、広間で  
行う季節になりました。暖かくしてお待ちしております。

南無阿弥陀仏

(坊守より)



真敬寺付近から見た東の山の雪景色 (11月25日)

実際のお話は  
YouTubeで



発行 〒939-1664富山県南砺市竹内440  
真宗大谷派(東) 小塚山真敬寺 宮地修  
0763-52-0196 携帯電話090-3760-5692

shinkyouji.com

検索

